

ヴェンク氏をいたむ

宮 島 達 夫

ドイツのギェンター・ヴェンク (Günther Wenck) 氏がなくなったという。ドイツだけでなく、ヨーロッパの空につよい光をはなつていた星がおちた、という感じである。一九一六年うまれだから、七六歳、このごろの標準からすれば、けつして長生きだったとはいえない。まだまだ活躍していただきたかつた方である。

ヴェンク氏の研究対象は、日本語の音韻・文法、なかでも音韻史であり、その主著には、

“Japanische Phonetik” I (1954) -IV (1959)

“Systematische Syntax des Japanischen” I-III (1974)

がある。どちらも、合計千ページをこえる大冊である。前者については、亀井孝氏と浜田敦氏がそれぞれ『国語学』三〇集(一九五七年)と『国語学』四一集(一九六〇年)の新刊紹介でふれており、ドイツ語学者川島淳夫氏による後者の書評は、『国語学』一〇二集(一九七五年)ののっている(なお、『国語学大辞典』参照)。また、小松英雄氏による、

“The Phonemics of Japanese” (1966)

についての書評がおなじく『国語学』の八二集(一九七〇年)にある。これらの方々によるヴェンク氏の評価は、きわめてたかく、絶賛といつていい。たとえば、「これだけ体系的なまとまりを古代漢字音の考察に対して与えた著述はかつてなかったとおもう。ながく記憶さるべき画期的な書である。将来、漢字音について発言するひとに

は、かならず参照しなければならない文献が加わったわけである。」(亀井)「その量から云つても、また質から見ても、おそらく内外を通じて比肩するものがない、画期的な業績であることは間違いない。

……日本でならば、勿論「学士院賞」ものである。」(浜田)「この書が、ふかい学問的洞察と透徹した論理とをもつてつらぬかれた、すぐれた日本語音楽論であることを、この評者は信じてうたがわなない。」(小松)「ドイツ語で書かれた日本語文法でこれほどの大著は名実ともに類を見ない実に意欲的な大作である。」(川島)

氏の著作が日本語で、またはせめて英語で発表されていたら、とおもう。

最近では、大著こそ発表していないが、

“Pratum Japonicum” (1987)

という論文集がでている。音韻史・文法など、二一編の論文をあつめたものである。

わたしは、正直にいつて、ヴェンク氏の業績をそれほどよんでいるわけではなく、前記の諸氏の評価につけたすべき、なにもものもつていない。にもかかわらず、ここに追悼の文をよせるのは、多少とも個人的な接触があつて、人となりを知っているからである。

ヴェンク氏は、一九六八年に客員研究員として国立国語研究所にこられた。書きことば研究室が現代雑誌九十種の報告書をだして、動詞・形容詞の記述の準備で用例をあつめていた時期である。氏は、文法論をかくために、これらの資料を利用したのである。

当時は、国語研究所の建物も現在のもではなく、昭和初期の日本軍の遺産で、すきま風とほこりになやまされていた。われわれの研究室は、階段をあがつてすぐの大きな部屋で、となりの小部屋に

は現代雑誌九十種のカードが保管されていた。ヴェンク氏は、朝、サンドイッチのはいった小さな包みをもってあらわれ、あとは一日中そのカード室にとじこもったままだった。貧弱な机のまえにすわって、用例をかきうつす仕事に没頭していたはずである。その部屋からでてくるのは、なにか資料の文についての質問があるときにかざられていた。それが毎日つづく。なるほど、あれがドイツ人というものか、と、その態度は、わたしたちに強烈な印象をあたえた。

雑談も、学問的な議論も、ほとんどした記憶がない。いまからおもえば、おいしい機会をのがしたのだが、なにか、そんなじやまをするものをよせつけない、きびしいものがあつた。国語研究所であつめた用例は、“Systematische Syntax des Japanischen”のなかに、おおいに利用されている。

ドイツでの仕事ぶりも、さぞかし徹底したものだっただろう。日本学者なかまとのつきあいよりも、孤高の道をひとりあゆむ方をえらんのようにみえる。うわさによれば、日本語に関するヴェンク氏の蔵書は、ドイツのどの大学よりも豊富だったという。しかも、たんに文献をあつめるだけでなく、じつに丹念によんでいたようだ。たとえば、

‘Das japanische Staatsinstitut für die Erforschung der japanischen Sprache’ (Orientalische Literatur-Zeitung. 1960 : 11/12)

という、国語研究所をくわしく紹介した文章がある。こんなにこまかく、国語研究所の出版物をよんだ人は日本人にもあまりいなかったはずである。

個人的にも、発表した論文にたいする意見を、まったく予想していなかったヴェンク氏からよせられて、意外におもつたことがある

が、ほかに同様の経験をおもちの方が、すくなくないのではないか。あの、きちんとした歴史的かなづかいの手紙に接することも、もうない。つつしんで、おくやみを申しあげる。

— 大阪大学教授 —

(平成五年二月十日 受理)